

小樽駅の“今・昔”

そしてこれから



昭和30年代初頭の駅前通りから見た小樽駅(小樽市総合博物館所蔵)

「一番線より、7時46分発、岩見沢行き普通列車が発車いたします」。構内に流れるアナウンスの声。足早にホームを歩き交う人の影。いつもと変わらない駅の光景がそこにある。

通勤や通学、買い物などで、多くの皆さんが利用している小樽駅。また、市外からの観光客が、列車に乗って小樽に降り立つ、最初の場所の一つでもあります。

北海道に鉄道が開通して、今年で131年。しかも、その起点が小樽であったことは皆さんもご存じでしょう。小樽は、鉄道の運行とともに、物資が集積する商業都市として発展し、今ある姿を築いてきました。鉄道とともに栄えた小樽の歴史を語る上で、小樽駅の存在は欠かせません。そこで、小樽駅の歴史を振り返るとともに、現在行われている駅の改修工事などについて紹介します。

←初代小樽駅
もともと稲穂町の墓地だった場所を造成して駅舎を建設。当時の駅は線路と同じ高さに建てられ、今よりも高い位置にあった。



↑2代目小樽駅
鉄道の運行とともに、まちは大きく発展していった。



←3代目小樽駅(現駅舎)
鉄骨鉄筋コンクリート造で、当時としては道内随一の近代建築駅舎だった。



※写真は、小樽市総合博物館所蔵。

小樽駅のあゆみ	
明治13(1880)年	北海道初の鉄道が開通(手宮～札幌)
36(1903)年	北海道鉄道株式会社の小樽中央駅(現在の小樽駅)が開業(蘭島までの部分開通)
37(1904)年	全線開通(小樽～函館) 駅名を高島駅に改称
38(1905)年	高島駅と小樽駅(現在の南小樽駅)間が線路で結ばれる(函館～旭川全通) 駅名を中央小樽駅に改称
40(1907)年	鉄道国有化法により国有鉄道へ移管
44(1911)年	駅舎を改築(2代目)
大正9(1920)年	駅名を小樽駅に改称(それまでの小樽駅は南小樽駅に改称)
昭和9(1934)年	駅舎を改築(3代目:現在の駅舎)
39(1964)年	小樽駅での貨物取り扱い廃止
43(1968)年	小樽～滝川間が電化
60(1985)年	手宮線廃止
62(1987)年	国鉄の分割民営化により北海道旅客鉄道株式会社(JR北海道)に移管
平成元(1989)年	上野駅と姉妹駅提携
15(2003)年	開駅100周年 4番ホームを「裕次郎ホーム」と命名
18(2006)年	小樽駅が国の登録有形文化財に指定
22(2010)年	小樽駅本屋が準鉄道記念物に指定

鉄道の開通と小樽駅の誕生

明治13(1880)年、手宮から札幌の区間で、北海道で初めての鉄道(幌内鉄道)が開通。もともとは、幌内(三笠市)の石炭を小樽港を経由して運ぶことを目的に建設された鉄路で、2年後に全線開通となりました。開拓使によって敷設された幌内鉄道は、その後、民間会社の北有社が請け負い、そして北海道炭礦鉄道に払い下げられます。

北海道の開拓とともに、鉄路は室蘭や旭川まで延伸。それに伴い、小樽は、小樽港を背景に物資の集積地として発展していきました。

また、幌内鉄道とは別に、当時、北海道第一の都市であった函館と小樽を鉄路で結ぶ計画があり、明治19年から、北海道庁により測量調査が行われていました。しかし、財政悪化などから計画は停滞。その後、設立された民間の函樽鉄道(後に北海道鉄道)が敷設工事を行い、明治36年に小樽中央駅が開業しました。これが現在の小樽駅です。翌年には、函館まで全線開通となります。鉄道開通の背景には、民間からの強い要請などのほか、ロシアの南下政策に対する軍事上の必要性もあり、政府の補助金を

小樽駅名の変遷

まちの発展とともに、駅名も変わっていきました。明治36年の開業当初は「小樽中央駅」でしたが、翌年の全線開通に合わせて、「高島駅」に改称。その翌年には「中央小樽駅」に改称しています。そして、大正9年に「小樽駅」という駅名になりました。これほど駅名が変わった駅は珍しいでしょう。(左上の表を参照)

「小樽駅」に改称される前、小樽駅の駅名は今の南小樽駅が名乗っていました。しかし、まちの中心部は移動しており、当時の小樽駅が、まちの主要駅と間違える人が少なくなかったことなどから、中央小樽駅が「小樽駅」に改称となったといわれています。

受けての完成でした。

明治38年には、北海道炭礦鉄道と結ばれたことにより、人と物の流れは大きく変化します。小樽の経済圏も広がり、現在の南小樽駅周辺だったまちの中心は、次第に現在の小樽駅前に移っていったのです。海と陸を結ぶ物資の中継地点として、地理的にも重要な位置にあった小樽駅は、中心部の急速な発展と小樽に大きな繁栄をもたらしました。



◀現在、改修工事が進む小樽駅。耐震補強やレイアウトの変更などのほか、昭和9年の建設当初の外観に復元する予定。



→昭和35年の小樽駅。多くの人が、列車に乗り込む朝の通勤ラッシュ。駅員が改札口に立って、切符を切る光景が懐かしい。



◀たくさんのバスやタクシーが停車する昭和38年の小樽駅前。再開発する前のため、駅前には背の低い建物が並んでいる（現在の長崎屋小樽店付近）。



↑小樽駅の貨物用ホームで荷物の積み出しを待つ光景。大正期の活気ある様子が伺える。小樽市総合博物館所蔵

↓安藤昭彦さん（小樽駅長）小樽市出身。JR北海道になってから10代目、国鉄時代から数えると50代目の小樽駅長。

→左右対称の姿で建てられた小樽駅（昭和30年代）・小樽市総合博物館所蔵



◀現在の小樽駅。石原裕次郎氏のパネルがある4番線の「裕次郎ホーム」は、観光客に人気の撮影ポイント。



↓村上勝さん（小樽駅構内立売商会 代表取締役）昭和29年に鉄道弘済会に勤務後、昭和56年から現職。会社は大正6年創業。



◀列車を待つ行商人たち。場所は手宮駅（昭和32年）。小樽駅も多くの行商人が利用した。



↑建物が完成した当初の小樽中央卸市場。（昭和32年）・小樽市総合博物館所蔵

↓木田忠さん（木田商店 代表取締役会長）昭和5年生まれ。バラックの時代から商いを始める。店は小樽中央卸市場内。



戦後の生活を支えた小樽駅

物資が集積する交通の要所として、まちの発展に大きく貢献した小樽駅。人口の増加とともに利用客も増え、さらに鉄道での貨物輸送量も増大するなど、この傾向は昭和初期まで続いていきました。しかし、終戦以降、次第に物資などの輸送に大きな変化が現れます。輸送の中心は、これまでの船舶から鉄道に転換され、中継港であった小樽港の利用が減少。さらに、道路の整備によりトラックでの輸送へと変化していきました。

ところが、駅の利用客だけは、終戦後もさらに増え続けていきました。小樽市史によると、利用客は戦前の4倍以上となっています。この当時から、駅の利用客が多かった時代でした。これは、金融や経済の中心が札幌に移動したことにより、通勤客の利用が増えたこと。さらに、戦後引き揚げ者などが生活のため、魚や食料品、雑貨などを仕入れて地方に行商するのに、多くの人が利用したことも理由の一つです。この人たちが、大きなブリキ缶を背負って行商していた「ガンガン部隊」です。ガンガン部隊の商品仕入れ先で

もあつた小樽中央卸市場の木田忠さん（木田商店）は、当時の様子こう振り返ります。

「昭和25年頃から商売を始め、当時は干物や水産加工品を扱ってました。ガンガン部隊がいた頃は、とにかく活気があつたね。みんな朝5時の始発列車に乗るため、先を争うように魚の干物を買ってさ。本当、飛ぶように売れたよ。一人じゃ運べないくらい仕入れる人もいて、よく小樽駅まで運んであげたこともあつたなあ。食べ物があまりない時代だったけど、小樽は魚がとれたし、恵まれていたんじゃないかな」

また、昭和29年から、鉄道弘済会（現在のキヨスク）で小樽駅構内の売店などを管理する仕事をしてきた、小樽駅構内立売商会の村上勝さんにもお話を伺いました。「ガンガン部隊の人は朝早い列車に乗るので、私はあまり見掛けなかつたですが、行商人のための専用車両があつたと聞いています。また、当時あつた手宮駅も多くのガンガン部隊が利用していたし、鉄道はみんなの生活にとって大切な足だったんですよ」この頃の小樽駅は、とても活気があつたという村上さん。駅を利用する人の出入りは多かつたです

ね。当時は、小樽経由で函館に行く急行や特急列車がありましたから。駅には食堂のほか売店が五つもあつたし、待合室も今よりずっと広かつた。駅弁や菓子などの売り子は15人もいて、よく売れていましたよ。懐かしいですね」

小樽駅は小樽のシンボル

まちの歴史とともに歩んできた小樽駅。現在私たちが利用する駅舎は3代目で、昭和9年に改築された建物です。昨年9月から始まった駅舎の耐震補強工事などに合わせ、建設当時の外観に復元する工事も行われています。そこで、小樽駅長の安藤昭彦さんに工事についてお聞きしました。

「今回の大規模な改修工事のメインは、耐震補強工事です。駅舎は築70年以上を経過しており、大きな地震には耐えられません。新しい駅舎にした方がいいのかもしれないが、歴史ある建物が残る小樽のまちには似合わないですよね」。

鉄骨鉄筋コンクリート造の駅舎としては、上野駅より北では小樽駅が初めてだったそうです。これまでに、幾度かの改修や増築が行われましたが、小樽駅を建設当初の左右対称の姿に復元することに、安

藤駅長は大きな意味があるといえます。

「駅舎そのものは、建設当初と変わっていません。レトロな雰囲気が残る小樽駅は、市民から長年親しまれている駅と自負しています。この駅舎を保存し、美しい駅の姿に復元することが、観光都市小樽の顔として大切と考えています」このほか、利便性に配慮してコインロッカーの集約や入り口近く待合室を移すなどの工事も実施。工事終了は来年3月の予定です。

「将来的には、小樽の情報発信ステーションを目指しています。観光客は、小樽駅に行けば知りたい情報がそろっている、そんな駅にしたいですね。そして、減少傾向にある利用客が増えてくれれば、いいことないですね」と安藤駅長は話します。

小樽のまちを見続けてきた小樽駅。時代の流れにより、まちの姿は大きく変わっていましたが、小樽駅の役割は変わることはありません。今も、そしてこれからも、「私たちの小樽駅」として、在り続けていくことでしょう。

【参考文献】

- 開駅100周年の浪漫 小樽駅（北海道旅客鉄道株式会社）
- おたる案内人小樽観光大学校検定試験公式テキストブック（小樽観光大学校）